

「第27回日本水大賞 2025日本ストックホルム青少年水大賞」表彰式

名誉総裁お言葉

2025年（令和7年）7月8日（火）

本日、「第27回日本水大賞 2025日本ストックホルム青少年水大賞」の表彰式が開催され、皆様にお目にかかれましたことを大変嬉しく思います。そして、本年各賞を受賞される皆様に心よりお喜びを申し上げます。

さて「水」は、私たちの暮らしを取り巻く自然の中でも最も身近な存在のひとつです。そして、人類のみならず地球上の生命にとって必要不可欠であるとともに、かけがえのない恵みを与えてくれるものでもあります。そのいっぽうで、近年頻発する大雨をはじめ、水は自然界の中で循環する過程で深刻な自然災害をもたらすものであることも忘れてはなりません。そして国連の2030年までの「持続可能な開発目標」では、「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」との目標が掲げられ、水に関する事柄が地球規模の課題になったことは皆さまご存じのとおりです。

そのような中、日本水大賞は、安全な水、きれいな水、おいしい水にあふれる日本を目指して、水循環系の健全化に向けた諸活動を広く顕彰するものです。本賞の対象となるような活動は必ずしも世の中に知られずに、全国で様々な主体により独自性のある取り組みが行われています。今回の第27回日本水大賞には、そうした取り組みを行っている団体・個人から75件の応募がありました。

第27回日本水大賞には「群馬県立吾妻中央高等学校環境工学研究部」の活動が選ばれました。

同校では、地域の土地改良区からの依頼を受け、農業用水路の管理データの作成に取り組みました。言うまでもなく水は稲作に不可欠なものであり、水田地帯に張り巡らせた農業用水路は稲作を支える最も重要なインフラです。この農業用水路は、整備後の時間経過とともに老朽化が進み、農業従事者の高齢化ともあいまって、その管理が大きな負担となっていました。同校の生徒たちが現地に入って測量し、総延長34kmにも及ぶ水路図を完成させ、水路の補修にも取り組まれています。

稲作を巡る多くの課題が明らかになっている昨今、このような高校生の取り組みには、明るい将来を見るように思えます。

また、2025日本ストックホルム青少年水大賞には「沖縄県立宮古総合実業高校環境班」の活動が選ばれました。同校は、第6回につづき2回目の受賞となります。

宮古島は飲料水を地下水に依存するいっぽうで、サトウキビ栽培をはじめとする農業に用いる土壌浸透性農薬が地下水に残留していることが懸念されています。同校では、土壌中のリンの活用を進める研究の過程において、サトウキビの搾りかすから生成される「バガス炭」が土壌浸透性農薬を吸着し、分解する機能を有する可能性を見出しました。

この研究は、宮古島だけでなく、世界で懸念されている農薬による水環境の汚染を抑制する、新たな農業技術の発展につながるものと期待されます。

私たちは、水から受ける恩恵に感謝し、健全な水循環系を礎とした国土と自然を後世に引き継いでいかなければなりません。本賞が、そのひとつの契機となり、多くの人々がそれぞれの地域で水を守り、水について考える活動を実践していけることを願っております。

おわりに、水に関わる皆様の活動が、日本はもとより世界へと発展していくことを祈念し、表彰式に寄せる言葉といたします。